

第II部 講演

講師 東京大学教授

大学院総合文化研究科 理学博士

酒井 邦嘉氏

脳を創る

読書をするときは、読むという受動的なものだけではなく、みずから言葉の意味を補って自分の言葉にして初めて意味がとれる。皆さんのお仕事でも、当然、意味を理解して記録として残されると思うが、単に言葉をそのまま記録すれば何でも残るじゃないかということではなくて、意味をきちんと伝えることが大切である。

読書の場合、「行間を読む能力」という言葉があるが、眼光紙背に徹すみたいにジッと文章を見て、そこに書かれていることの奥にあるものをむしろメッセージとして受け取る。そのためには我々は想像力を働かせる必要がある。これは訓練ではなくて、日常的に読書をしている中で高められる能力である。余り意識しなくても自然に想像力を高めることができるのが読書のよさであり、楽しみである。

昔、「話せばわかる」という言葉

があったが、話してわかるのだったらこんなに楽なことはない。我々みんな脳が違うし経験も違うし、同じことを聞いても考えることは全然違うので、ストレートに話をわかしてもらうのはむしろなかなか難しい作業である。作家はそこをうまく大衆向けに、多くの人が想像力を働かすところまで誘導して計算して書く。しかも書き過ぎたら味がないので、できる限り書かずにみんなにそう思わせるところが腕なわけで、筆の力とはそういうことである。

当然、受け手側も考える力や想像力がなければ文学作品を味わうことはできない。生涯にわたって脳を創るために、読書ほど簡便で効果的なものはない。

脳は日々変化し、成長する

我々の脳は、日々、読書経験を通して変化し成長していく。大人になったから脳が変化しないなんていうことは全然ない。その証拠に、だんだん年齢が上がると物忘れが心配になってくるが、忘れるということも人間的な行為なので、忘れることを含めて我々は変わっていく。

また、「習わぬ経を読む」という言葉がある。これは、繰り返し同じ情報に触れると脳が必要だと思って覚えてしまうという自然の学習の仕方である。限られた情報を繰り返し読むことによって脳に定着し、それが自分のものになっていく。さらにそれを使って次に何かクリエイティブなことができるというサイクルになる。

先入観がくせもの

我々が今まで生きてきた中で持っている想像力というのが、実は先入観になってしまって、そこから先に考えることをとめてしまうということがある。あ、これは知っている、これはわかっていると云った時点でもう脳は反応しなくなってしまう。それから、瞬時に意味を想像してしまうので、慣れている人ほど誤字や脱字に気づかない。特に自分が書いた文章はわかって書いているので誤りに気づきにくいということになる。

自分の書いたものの誤字、脱字がきちんと発見できるか、もしくは、これは誤解を呼ぶような表現だから書き改める必要があるということ自分で理解できるかどうかである。

コンピューターの画面上では、注意を向ける範囲をコントロール

しにくい。どんどんスクロールしていくので、一回消えてしまえばもう忘れてしまう。紙であれば常に行きつ戻りつできるので、何か引っかかったらすぐパッと見れる。

脳というのは、一度先入観が生じてしまうとこれを消すのが大変。先入観をつくらない人がいれば天才だと思うが、それはできない。

人間の言語能力はトレーニングできるのか

入力というのは想像力に関係している。来たものをそのまま受け取るのではなくて、補って自分の言葉にする。だから、入力はあるだけ少ないほうが脳は鍛えられる。

俳句に見られるように、なぜ人間の脳は、非常に限られたよい組み合わせを発見し、しかもそういうものを常につくり続けられるのか。これは人間の持っている最もすぐれた能力である。組み合わせを変えることもできるし、これがあるんだったら次にこういうのをつくってやろうと。そこは人間の理解なので、僕はこういう研究をこれからやりたいと思っている。

近著：『芸術を創る脳——美・言語・人間性をめぐる対話』（東京大学出版会）の紹介があった。